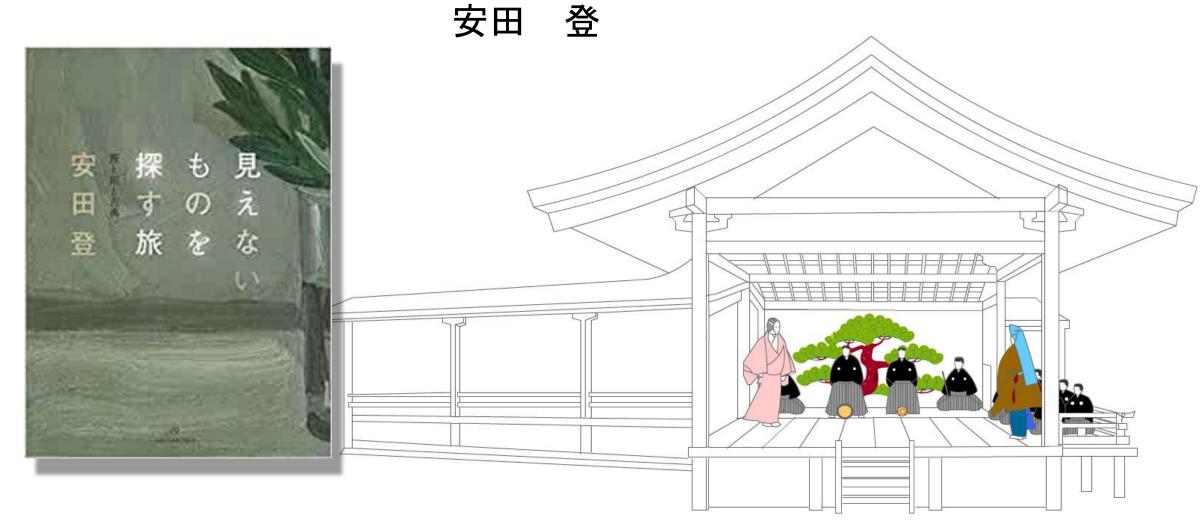
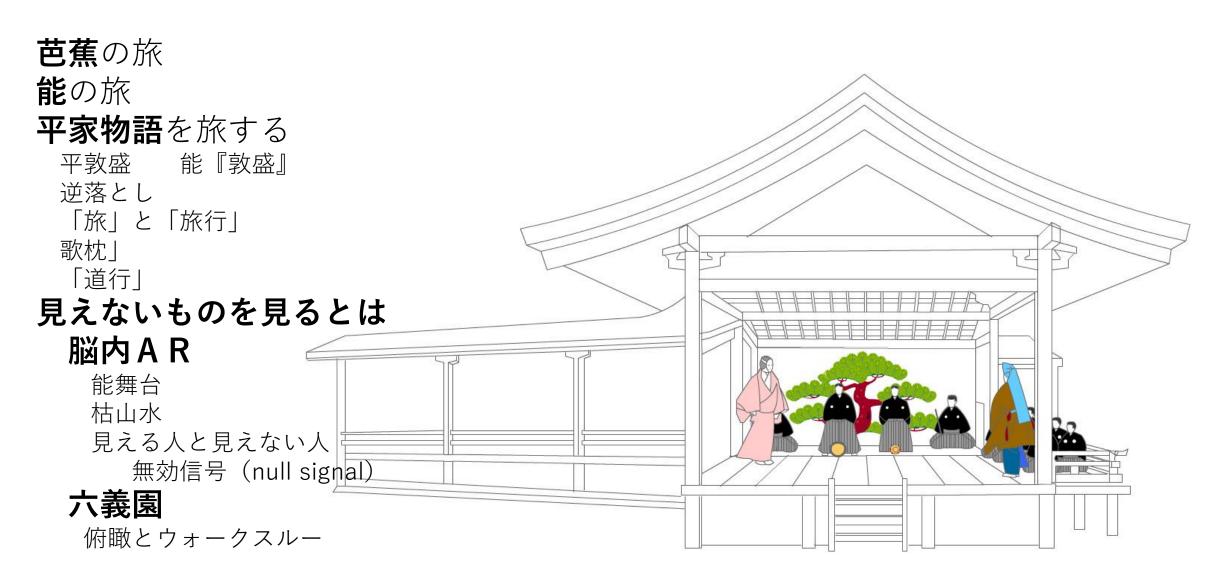
一册会

『見えないものを探す旅(亜紀書房)』

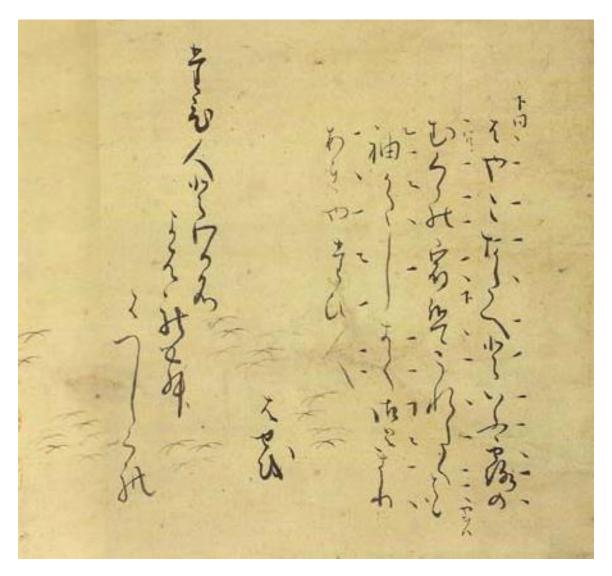


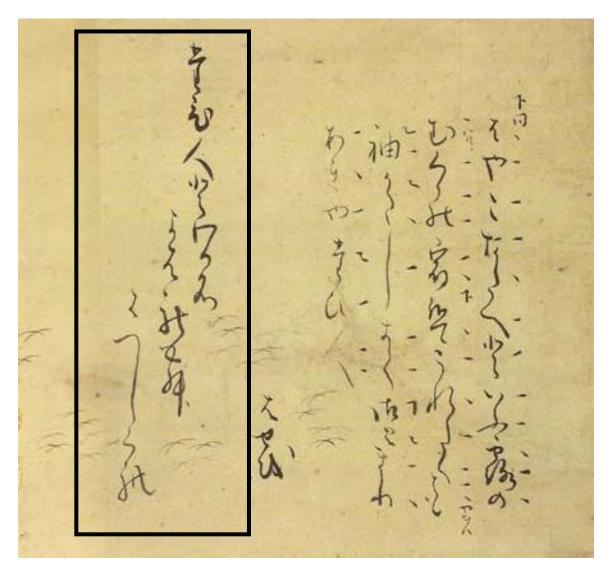


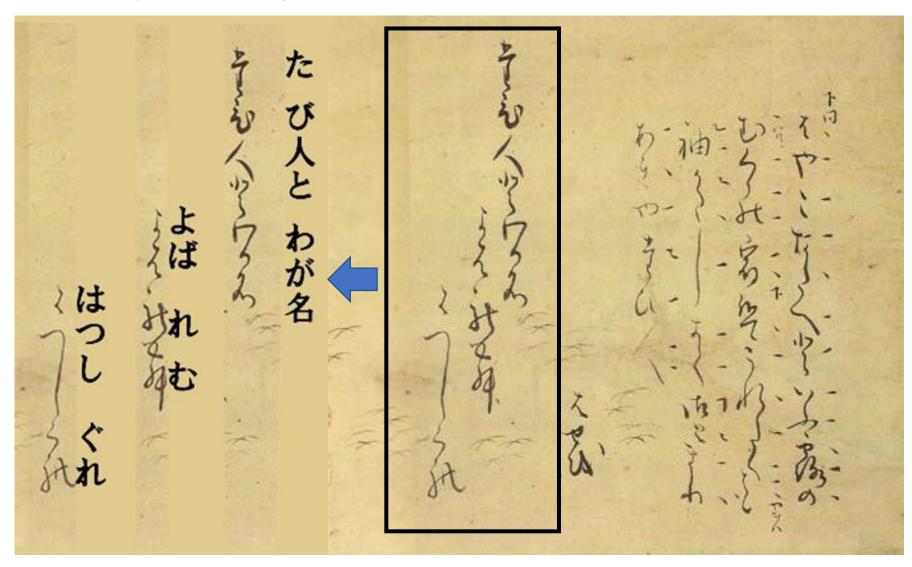
今日、お話すること









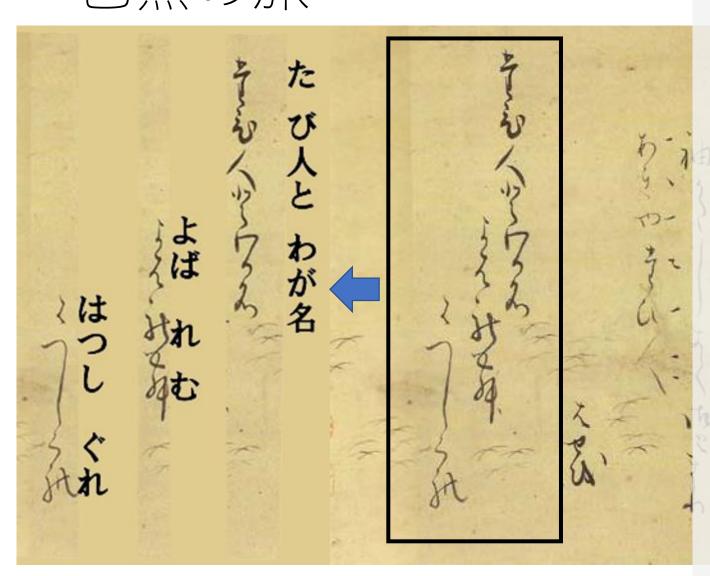


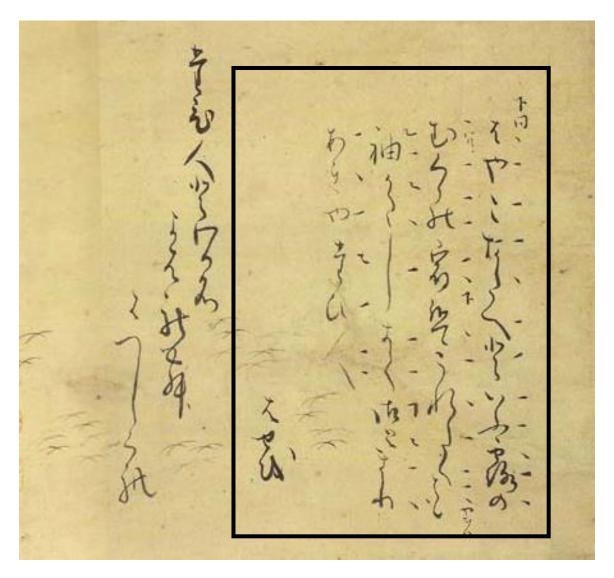
身は風葉の行末なき心地神無月の初、空定めなき 我名よばれん 初 て、き、

又山茶花を宿々に

せ此場城とをの 住 てなす。 て其角亭におゐて関送リ 、**長太郎**と云もの、

『笈の小文』



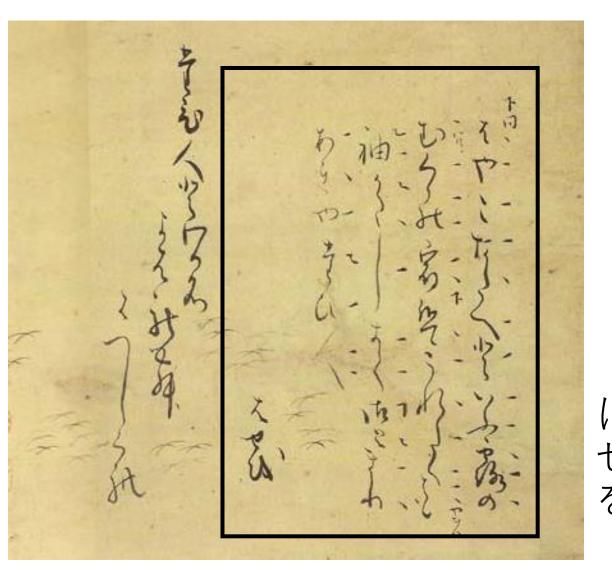


な

露

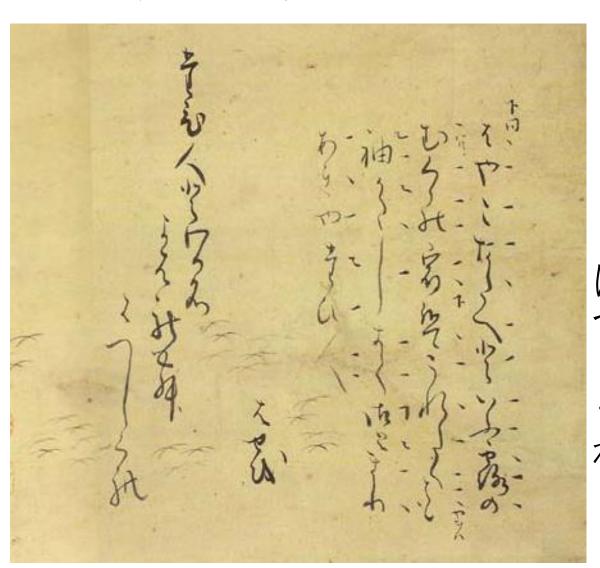
 \mathcal{O}

芭蕉の旅



 \mathcal{O} びき宿た てはうと またふ

はせを



よわが はれ名 つむ

あ袖むは れからこ 宿た はう またふ 露



よわがが れ名む

ワ後**前愕** キシ**シ枝** 旅楽

れかたら 宿 き またふ 露

あ袖むは

は

能

の里の

住吉の里の男

お供の僧 人富士の妻 妻

女

よわが はれ名 つむ

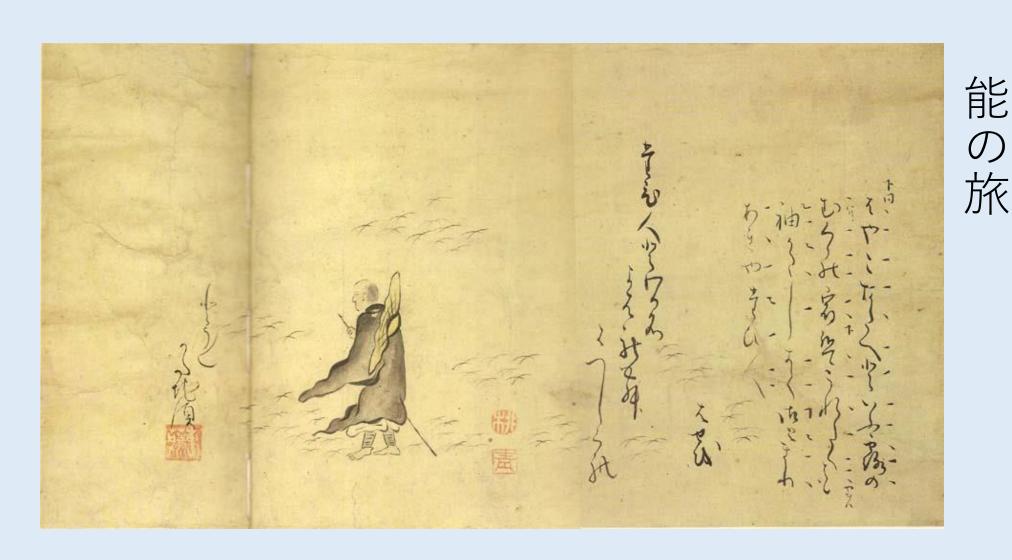
あ袖むは れかたら 宿た

またふ

よわが はれ名 つむ

あ袖むは れかたら 宿た

またふ



見えない 出会う旅







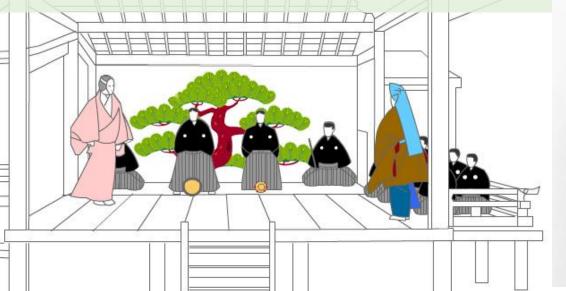




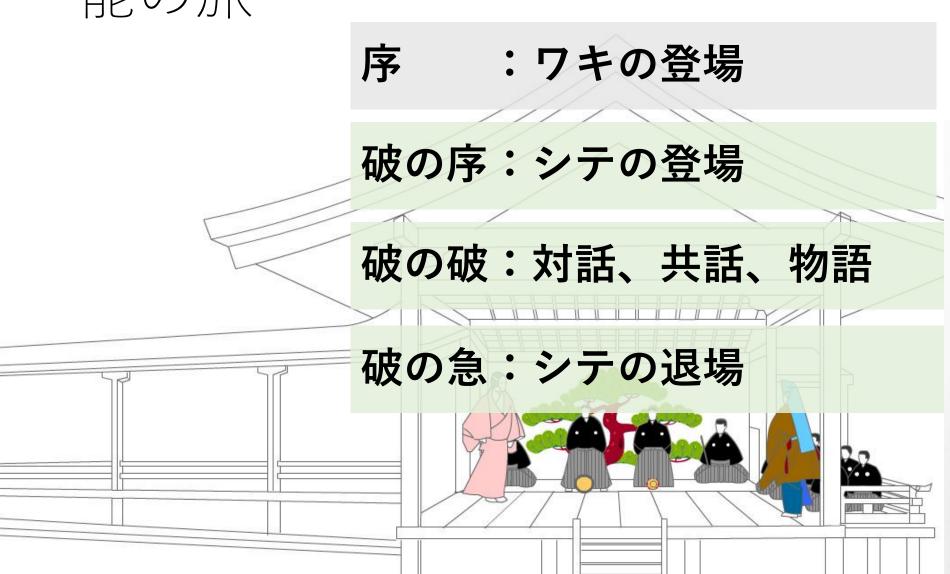
序 : ワキの登場

破の序:シテの登場

破の破:対話、共話、物語









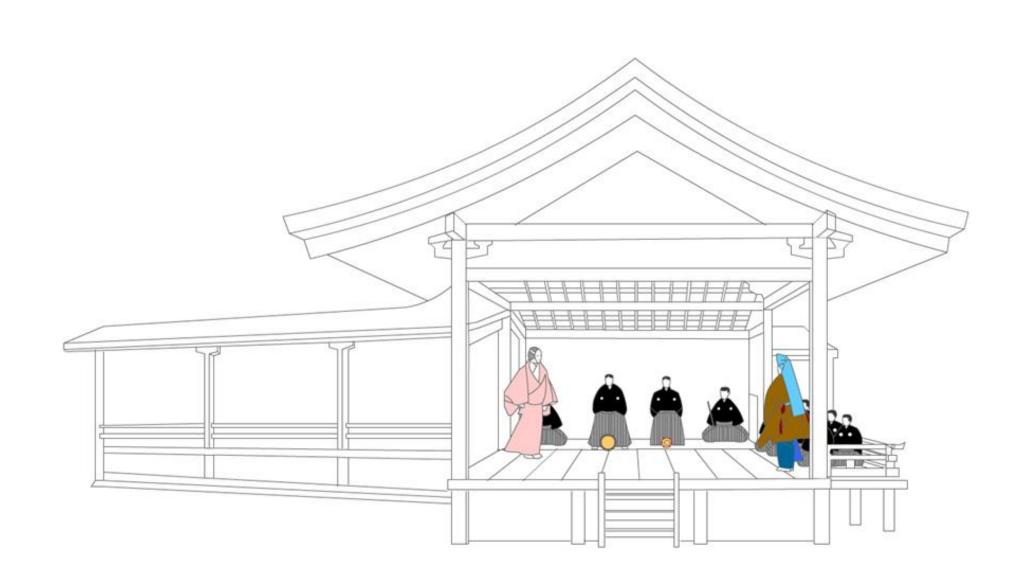
序 : ワキの登場

破の序:シテの登場

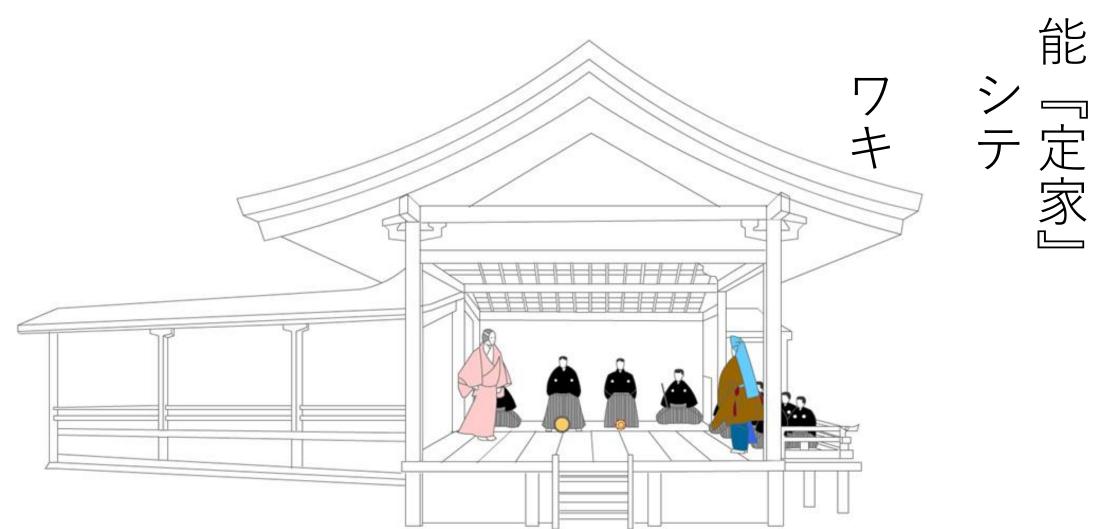
破の破:対話、共話、物語

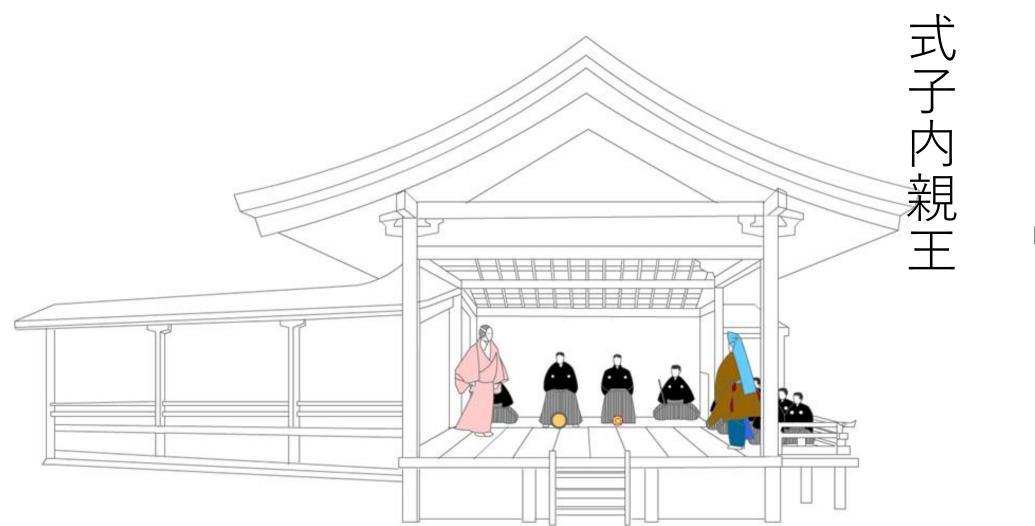
破の急:シテの退場

破の序:後シテ・語り・舞



能『定家』





能『定家』

長らる。弱弱 絶の緒 羽もぞするいることの なば絶え

能『定家』

内親王

能 『定家』

か知の樹の仮あにもあ。れががの時と頃いのを給は 原 も私り世るし々と葉む所の しのしなと難なもやるか定 此家ぐりいしれ定ら宿や家 歌に**れけ**ふさばめ**ん**の °の をてそり心り。な。。さ卿 やとめ神をな分き 歌ての申書け無。がき はさ建 らて時

いてて

りを河一生もは世しにきた言誰り雨れのやれ雨き **られ流の縁**のだ残時は ばき**誠な**をはのづ**言**とへ 。に**よき**知申年れ**の**ゞる すか**ん。月**。

にとれ蔭は世なる雨れ をの朽にる跡はな る言の葉 る言の葉 る古事を。 おおがら。 ながら。 で で で た で た で だ り 語 のか 。な れ ば な

+

シワシテキテ に。

能 『定家』

いてて

「「「一でです」「「一でです」「「一でです」である。 「おった」では、「一でです」では、「一でです。」では、「一でできます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できます。」では、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、「できままり、」では、「できままり、」では、「できままり、」では、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できままり、」では、「できままり、「できまままり、「できまままり、「できままままり、「できままままり、「できまままり、「で りを河一生もは世しにきた言誰り雨れのやれ雨き か知の樹の仮あにもあ。れががの時と頃いのを給は **られ流の縁**のだ残時は ばき**誠な**をはのづ言とへ 。に **よき** 知 申 年 れ **の** ゞ る 原 も私り世るし々と葉む所の しのしなと難なもやるか定 此家ぐりいしれ定ら宿や家 歌に**れけ**ふさばめ**ん**の °の をてそり心り。な。。さ卿 やとめ神をな分き 歌ての申書け無。がき はさ建 らて時 すか**ん。月。**

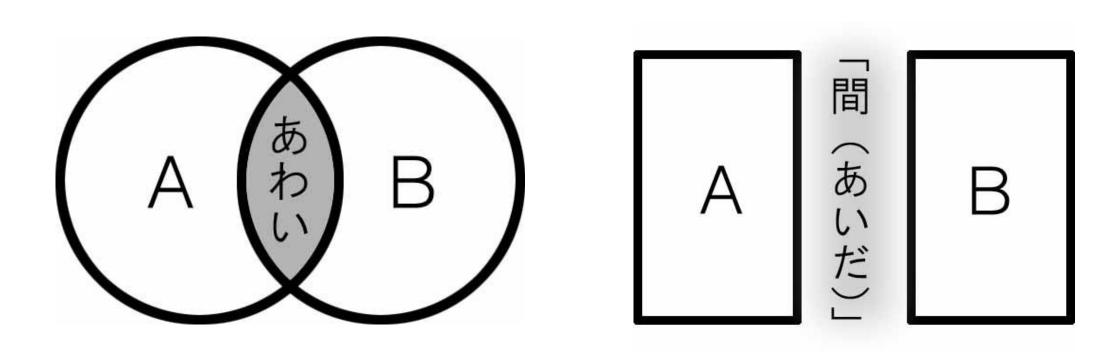
のか 。な な

語 れ ば

シワシテキテ + にとれ蔭は世なる雨れ をの朽にる跡はな せぬ。 に。

→ 共 話

能の旅 共話とあわい



会う (会ふ) (縁側や軒)

空き処 (ど)



能『定家』

地謡 今

宿

0

き端には澄は **家**の。 。家

0

かな。

も 物 露 荒 庭 古 軒 実 あ 心 すのれもき端には澄ははご宿の籬にの定れみ昔昔 凄きタ きった (まがき) (まからき) (ま i. き 夕 枯 らる叢(くさむら) なに な IJ け 1) 0 の。 0

地謡

宿 昔

は にの定れみ昔

あ心 端には澄 をにの 知 る 其 も夢の

実 定 。家 \mathcal{O}_{\circ}

古軒 (まがき) (まがき) タな時や

き か

な。

庭 も の籬 る叢 もそれとな (くさむら)

露荒 すのご宿 のれ に

凌宿も**枯** (き**ち 右 増 グ ベ ベ** な

な V) け 1)

話 境 は

共

なった

色他 け界

景 に 溶 す

も \mathcal{O} \mathcal{O} あ は れ (本居宣長)

能の旅 共話とあわい

『朧月夜』 高野辰之作詞 岡野貞一作曲 文部省唱歌(六年)

菜の花畠(ばたけ)に入り日薄れ見わたす山の端(は)霞ふかし 春風そよふく空を見れば 夕月かかりてにおい淡し

里わの火影も森の色も 田中の小路をたどる人も 蛙(かわず)のなくねも かねの音も さながら霞める、朧月夜



見えない。 →の残念を晴らか世界を探し

平家物語を旅する 平敦盛



『一の谷合戦図屏風』永青文庫蔵 平敦盛を呼び止める熊谷直実。

·<u>パブリック・ドメイン</u>

平家物語を旅する 平敦盛



一の谷の戦破れにしかば、武蔵国の住人、熊谷次郎直実、「**平家の公達の助け船に乗らんとて、汀の方へや落ち給ふ事もやおはすらん、あはれよき大将軍に組まばや**」とて、磯の方へ歩まする所に、 練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄(もよぎ)匂ひの鎧着て、

金(こがね)作りの太刀をはき、

二十四さいたる截生(きりふ)

の矢負ひ、滋籐の弓持つて、

鍬形うつたる甲の緒をしめ、

連銭葦毛なる馬に、金覆輪(きんぷくりん)の鞍置いて乗つたる武者一騎、

沖なる船に目をかけて、海へざつとうち入り、五六段(たん)(約55~66m)ばかりぞ泳いだるを、

平家物語を旅する 平敦盛



熊谷、

「あれは大将軍とこそ見参らせ候へ。 まさなうも敵に後ろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ」

と、扇を挙げて招きければ、招かれて取つて返し、 渚(なぎさ)に打ち上がらんとし給ふ所に、 熊谷波うちぎはにて押し並べ、ひつ組んで、どうど落つ。



『一の谷合戦図屏風』永青文庫蔵 平敦盛を呼び止める熊谷直実。

·<u>パブリック・ドメイン</u>



取つて押さへて首をかかんと内甲を押しあふのけて見ければ、 年の齢十六七ばかんなるが、薄化粧して金黒(かねぐろ)なり。 我が子の小次郎が齢ほどにて、容顔まことに美麗なり。

「そもそもいかなる人にてましまし候ふやらん。 名乗らせ給へ。助け参らせん」

と申しければ、

「かういふわ殿は誰そ」と問ひ給へば、熊谷

「ものその数にては候はねども、武蔵国の住人、熊谷次郎直実」と名乗り申す。



「さては汝がためにはよい敵ぞ。 存ずる旨あれば名乗る事はあるまじ。 名乗らずとも首をとつて人に問へ。見知らうずる」

とぞ宣ひける。熊谷、

「あつぱれ大将軍や。この人一人討ち奉るとも、 負くべき戦に勝つ事もよもあらじ。 また討ち奉らずとも、勝つべき戦に負くることもよもあらじ。 我が子の小次郎が薄手負ひたるをだにも、直実は心苦しう 思ふぞかし。この殿の父、討たれ給ひぬと聞いて、 いかばかりかは歎き給はんずらん。 あっぱれたすけ参らせばや」と思ひて、 後ろをかへりみたりければ、土肥、梶原五十騎ばかりで続いたり。



熊谷、涙をはらはらと流いて、

「助け参らせんと存じ候へども、味方の兵(つはもの)ども 雲霞のごとくに候へば、よものがし参らせ候はじ。 同じくは、直実が手にかけ奉て、後の御孝養(おんけうやう) をこそつかまつり候はめ」と申しければ、

「ただ何さまにも、とうとう首をとれ」とぞ宣ひける。

熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしともおぼえず、 目もくれ心も消え果てて、前後不覚におぼえけれども、 さてしもあるべき事ならねば、**泣く泣く首をぞ掻いてんげる**。



「あはれ弓矢とる身ほど口惜しかりける事はなし。 武芸の家に生まれずは、何とてかただ今 かかる憂き目をば見るべき。 情けなうも討ち奉るものかな」とかきくどき、 袖を顔に押し当てて、さめざめとぞ泣きゐたる。

ややあつて、鎧直垂をとつて首をつつまんとしけるに、 **錦の袋に入れたりける笛**をぞ腰にさされたる。

<略>

後に聞けば、修理大夫(だいぶ)経盛の子息 大夫**敦盛とて、生年十七**にぞなられける。 それよりしてこそ、熊谷が**発心の心**は進みけれ。

→能『敦盛』で熊谷はワキになる

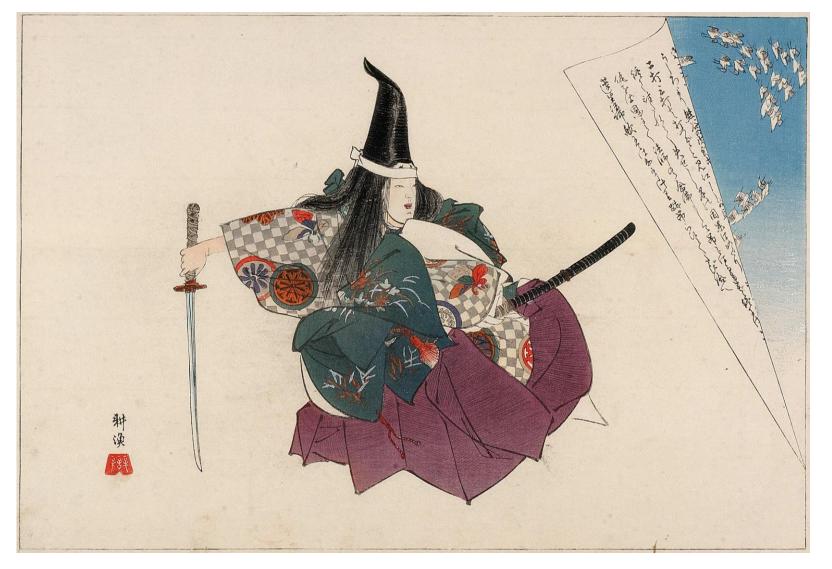


なぜ熊谷直実は「ワキ」になったのか

ワキとは何か

なぜワキは旅をするのか

平家物語を旅する能『敦盛』



前シテ 草刈男 後シテ 平敦盛の霊 ツレ 草刈男たち ワキ 蓮生法師 (熊谷直実出家)

月岡耕漁 Scene from Nô-drama "Atsumori" パブリック・ドメイン

平家物語を旅する能『敦盛』



平家物語を旅する能『敦盛』









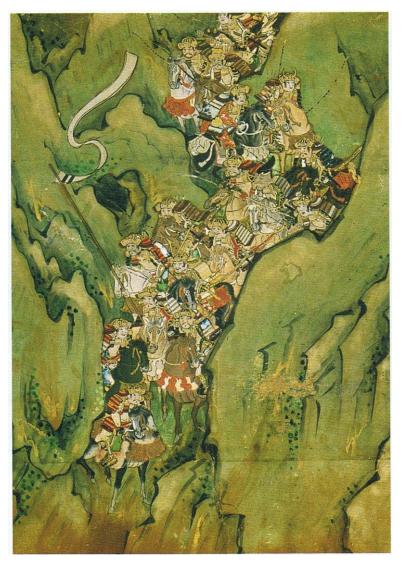


かかりしかども、源氏大手ばかりでは、いかにも叶ふべしとも見えざりしに、七日の卯の刻に、**九郎御曹司(義経)**、その勢三千余騎、ひよどり越えに打ち上げ、城郭はるかに見下しておはしける… 〈略〉

さるほどに御曹司、

「馬ども少々落といてみん」とて、 鞍置馬ども十匹ばかり追ひ落とさる。 或いは相違なく落ちて行くもあり、或いは足打ち折り、 転んで死ぬるもあり。その中に、鞍置馬三匹、 越中前司が屋形の上に落ち付いて、 身みぶるひしてこそ立つたりけれ。

『源平合図屏風』「一ノ谷」パブリック・ドメイン



御曹司、「馬どもは主主が心えて落とさんずるには、 損ずまじかりけるぞ。重ね落とせ、義経を手本にせよ」

とて、まづ三十騎ばかり、 真つ先かけて落とされければ、 大勢みな続いて落としける。 後陣に落とす人の鐙の鼻は、 先陣の鎧甲に当たるほどなり。 小石まじりの真砂なりければ、 流れ落としに二町(約200m)ばかり ざつとおといて、壇なる所にひかへたり。

それより下を見下ろせば、大磐石の苔むしたるが、**つるべおろし**に十四五丈(約45m)ぞくだつたる。

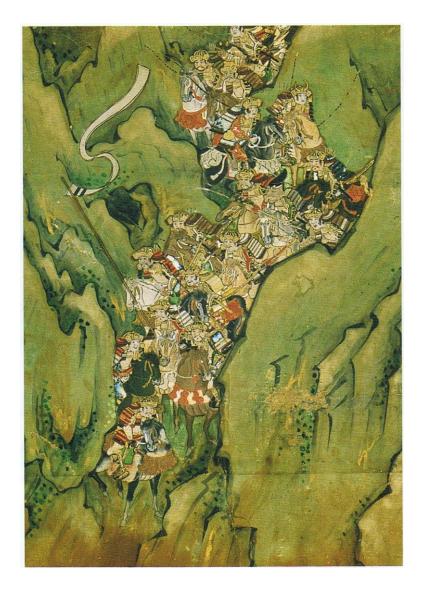


後ろへ取つて帰すべきやうもなし。 また前へ落とすべしともみえざりければ、 兵ども、「ここぞ最後」と申して、 あきれてひかへたる所に、 三浦の佐原十郎義連、進み出でて申しけるは、

「三浦の方で、我等は鳥一つたてても、 朝夕かやうの所をば馳せありけ。 これは三浦の方の馬場よ」とて、

真つ先かけて落としければ大勢みな続いて落とす。 あまりのいぶせさに、目をふさいでぞ落としける。 ゑいゑい声を忍びにして、馬に力をつけて落とす。 おほかた人のしわざとは見えず、

ただ鬼神の所為とぞ見えたりける。



落としもはてねば、鬨をどつとつくる。 三千余騎が声なれども、山びここたへて十万余騎 とぞ聞こえける。 村上判官代康国が手より火を出だして、 平家の屋形仮屋をみな焼き払ふ。 折節風ははげしし、黒煙おしかけたり。 平家の兵ども、もしや助かると、 前の海へぞ多く馳せ入りける。 汀には**助け船**どもいくらもありけれども、 船一艘に物の具したる者ども四五百人、

船一艘に物の具したる者ども四五百人、 千人ばかりこみ乗らうに、なじかはよかるべき。 汀より三町ばかり漕ぎ出でて、 目の前にて**大船三艘沈みにけり**。







●見え そえな 一のない 古たい世 典め人界 にとを をは出探 会しう

なぜ旅なのか

見え そえな 一のない 古たい世 典め人界 にとを をは出探 会しう

なぜ旅なのか

そえな 旅画のない 古たい世 と典め人界 旅をは出探 会しう 行知 違

そえな 歌旅画のない 古たい世 」と典め人界 にとを 日旅をは出探 会しう 本行知

わが古代信仰では、**神霊の寓り**として、色々の物を考へた。

其中でも、祭時に当つて、最大切な**神語を託宣する者**の、**神霊の移るを待つ設備**が、**まくら**である。

だから、其枕の中には、**神霊が一時寓る**とせられたのである。

其神霊とも言ふべき物に、**頭を置くことが、 霊の移入の方便**となるので、外側の条件は、 **託宣者が仮睡する**と言ふ形を取る訣である。 (折口信夫「文学様式の発生」)

● 見え そえな 歌旅画のない 枕一古たい世 一と典め人界 と一一にとを 日旅をは出探 本行知会し のしるう 地 名

そえな 道歌旅』のない 行枕一古たい世 一一と典め人界 にとを 旅をは出探 会しう 行知

能 敦 盛

そえな 道歌旅 たい 典 は出探 旅を 会しう 行知

え 昆 淀 に 湯 に こ 像 の山 ににも池崎る出出 もと水を小で 着や き 須 に 歴 過ぎ



昆陽 須 磨 過ぎ 「敦盛」 る道行

0

見えないものを見るとは 脳内AR

脳内AR

日本人は脳内AR能力に優れている



脳内AR

日本人は脳内AR能力に優れている 能舞台に大道具を置かない 枯山水というスクリーン



枯山水

大徳寺 龍吟庭



大徳寺 龍吟庭 室町時代に造られた **須弥山式**の枯山水

中央に突出している石が須弥山で 一面の苔が大海を表している。 「我らが宇宙世界は九つの山と 八つの海からなり、 その中心が須弥山と云い 高さも深さも八万由句と はかり知れない。 これが私たち本来具え有している 絶対的人間性で、 誰も窺い犯すことの出来ない 本来の姿である これを表しているのがこの龍吟庭で、 これを自ら発見することが禅の覚りである。

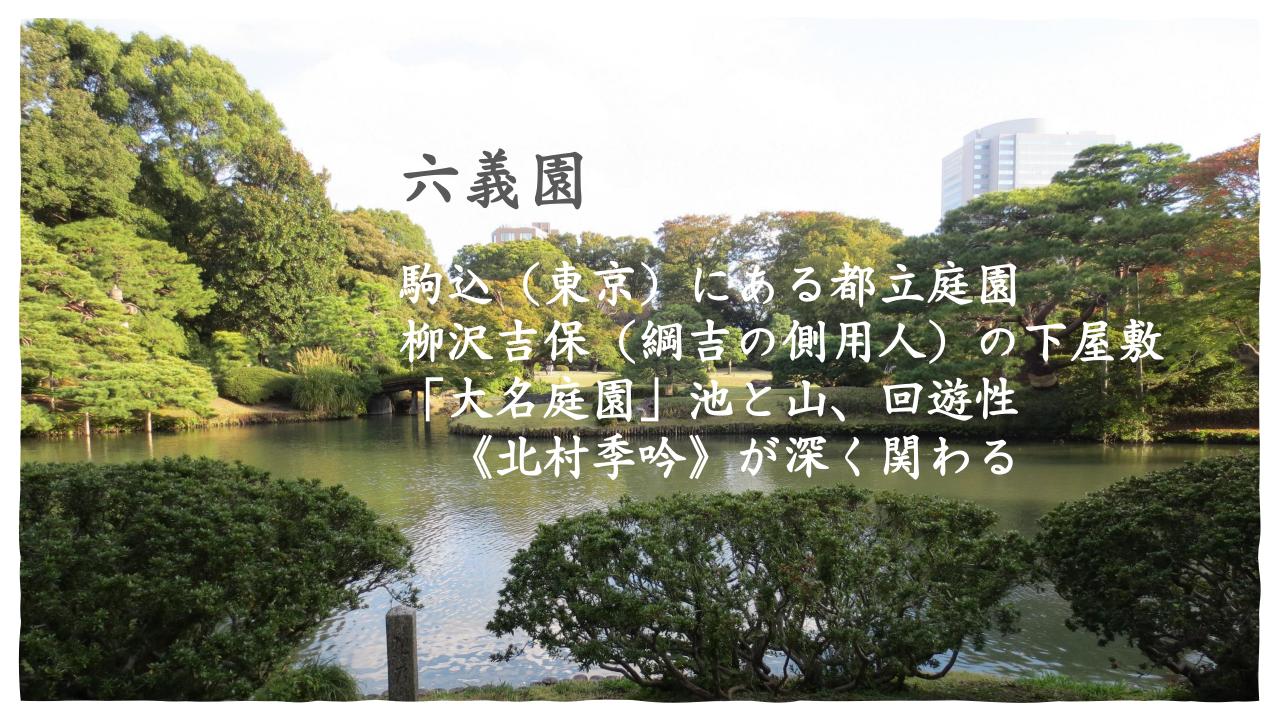
脳内AR

日本人は脳内AR能力に優れている 能舞台に大道具を置かない 枯山水というスクリーン 見える人と見えない人 無効信号 (null signal)

『脳の中の天使(ラマチャンドラン)』P.180~







見えないものを見るとは 六義園

【基本的な楽しみ方】

- ①石柱(八十八→現在確認し得るものは十六)を見つける
- ②その石柱に関連する和歌などが浮かぶ(浮かべる)
- ③すると脳内ARが発動し(発動させ)、 現実の景色に脳内の景色が重なったり(重ねたり)、
 - ※音が聞こえたり、香りがしたり、

皮膚で何かを感じたり等々…

能の謡が出てきたり(思い出したり)、

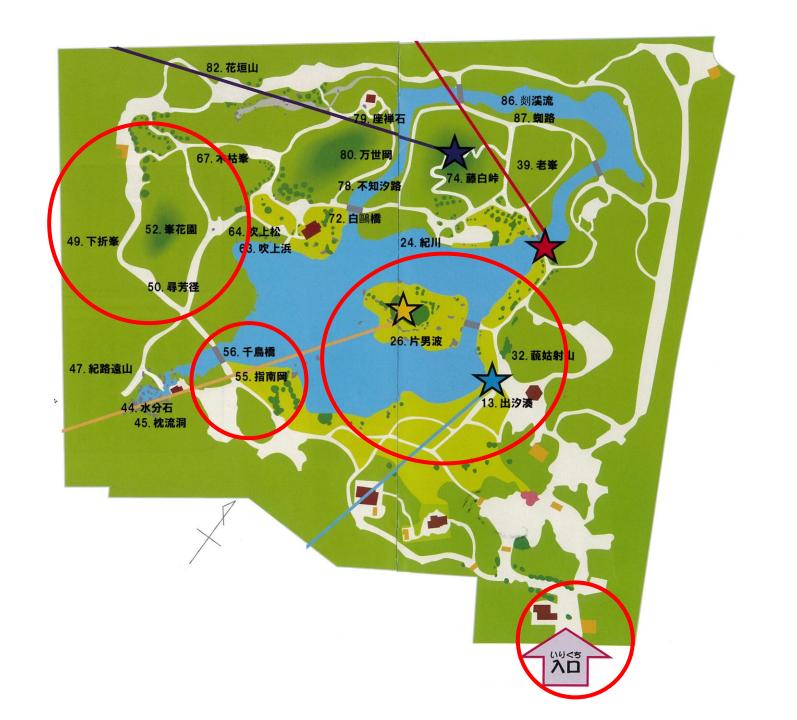
和歌が浮かんだり(作ったり)する



















遊芸門

ゆき(悠紀)のもんゆうげいもん

《入口》





遊芸門

道に志し、徳に拠り、仁に依り (志於道、拠於徳、依仁) 芸に遊ぶ (遊於芸) 『論語』





遊芸門

道に志し、徳に拠り、仁に依り(志於道、拠於徳、依仁)

芸に遊ぶ(遊於芸) ※「道」・「歩行」に関する漢字





遊芸門

芸に遊ぶ:六芸(礼、楽、射、御、書、数) リベラル・アーツ

(文法学・修辞学・論理学:算術・幾何・天文学・音楽)





遊芸門

芸に遊ぶ:六芸

(遊於芸) リベラル・アーツ

トレーニングと遊び





遊芸門

芸に遊ぶ: 六芸・・歌を詠む(歩きながら)

(遊於芸) リベラル・アーツ





茶い室ま た な っ 泉 る。泉亭と

詞心 林泉 はは (千載集にしてよ) 序し深

心泉

















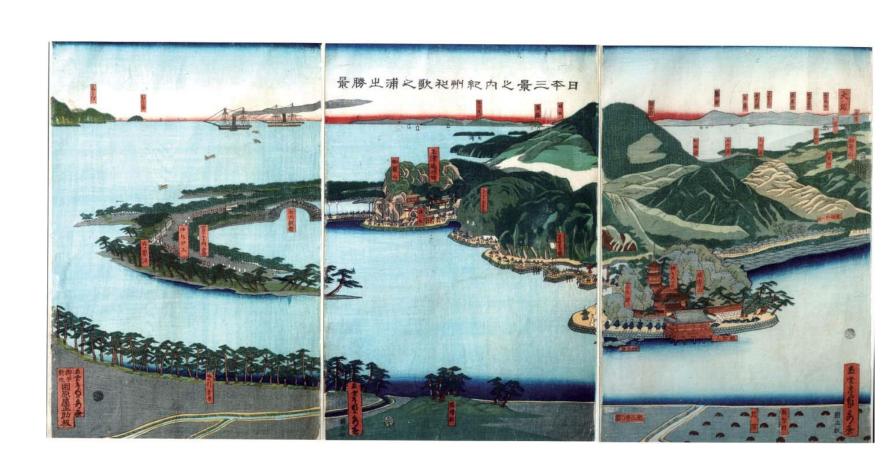




和歌の浦に

和歌の聖地

景勝地に



和歌の浦に

和別の出汐の和歌の浦に

熟 潮 今も月乗津 はか待りに 、漕なてせ 領ぎひばむ 田出ぬ

和歌の浦に

こる こゑぞさ 慈しの

和歌の浦においる

こゑぞさ

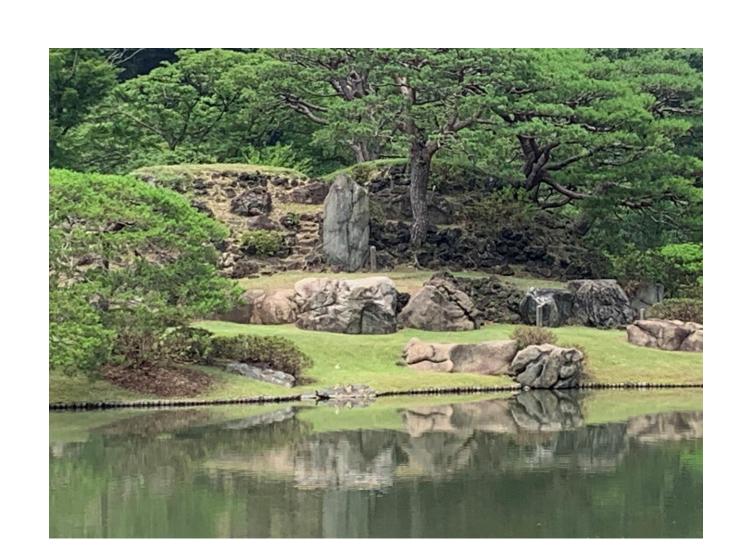
一蕊

※子 目能を 一思 隅 も し 見 も 鶴

居場所 な なっ 鶴

歌 ま沙に











株 背山 な る

原露だ 信 け て き



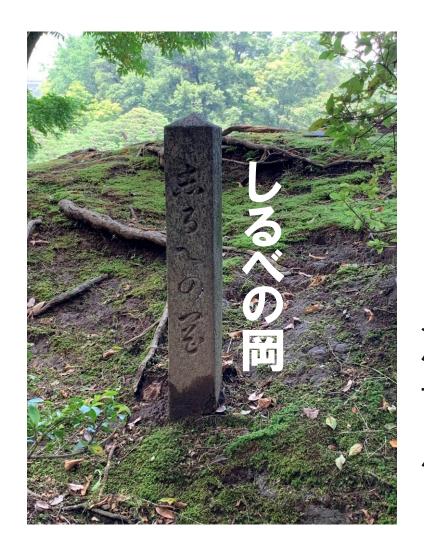
妹背山 中に生たる











尋 和お行 この浦ぢの鳥

道あ (紀べる 叔せか 氏よた 朝に 臣



尋 和ね寄行 この浦ぢの鳥

道あ (紀べる 叔せかた 氏よた湯 朝に 臣



尋 和お行 の浦ぢの

名歌をの では、 では、 を必ずがあらば、 を必ずがあるがは、 を必ずがあるがは、 を必ずがあるがは、 を必ずがある。 を必ずがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではよりがあるがは、 ではないがあるがは、 ではないがあるがあるがは、 ではないがあるがは、 ではないがあるがあるがは、 ではないがあるがあるがあるがあるが、 ではないがあるがあるがあるが、 ではないがあるがあるが、 ではないがあるが、 ではないが、 ではないがあるが、 ではないがあるが、 ではないが、 ではない



哥行 道あ 紀るがれるが 氏べた浜ぢ 朝せに糸の



ワキ=方士

常草仄波魂幻尋世のに路のもね 能の仮見を在が行る解え分所なく 楊にのしけは伝責着枕島て其に 妃きゆ山行処て 一にふのくとも 。船し

和お行

この浦ぢの



















能の話を語作の話を記れる がな?

「橋を渡る」









尋芳径 花尋 (と)



和歌山から奈良へワー花尋(と)ふ径手等の一方野一古野





百千鳥。 電も花なる心, がよ止まりゆ, がよれるも知らぬ, をよれるも知らぬ, **尋芳径** 花尋(と)ふ径 お事当好の名所 古野=桜の名所 古野の名所 能かも花なくに。 いける。というでは、日数経で、日数経で、日数経で、









吉野山道かへ

下折峯

まだ見ぬかたの まだ見ぬかたの



下折峯

古野山本のおかれ







峯花園(みねのはなぞの)

(常磐井入道前太政大臣) 奉の花園風吹けば 一本の花園風吹けば 三吉野の

(常磐井入道前太政大臣) 峯の花園風吹けば 峯花園(みねのはなぞの) 書の花石

み吉頻の

(後鳥羽院)奉のあけぼ嵐も白き

大ををを 山雲

枯峯(こがらしのみね)

秋

のが (定家)

のろび 色ふぬ に人

木上夜 枯のを に峯

よこ雲

(家となり

枯峯(こがらしのみね)

雲津やそ 一切になるではなる 雲香梅(うんかうばい)

か。 き 上 に

一句でを移する 一句である 一句ではない 一句である 一句では、 一句

天津そらなる

雲香梅(うんかうばい) ふ風 かったがある。 のだに









磐白いて 磐白の 浜松が枝を 引き結び またかへり見む

藤白峠



(有馬皇子)

草枕にあればっちがはあればっちがある。

藤白峠

見えないものを見るとは 六義園



八分り見むり入りが

磐白いて 磐白の ま幸くあが枝を がみんが がる人が

藤白峠

見えないものを見るとは 六義園 **《藤白峠》**



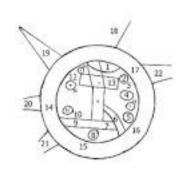


見えないものを見るとは 六義園 《藤白峠》



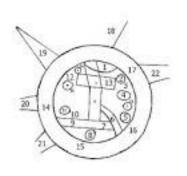






bàd city wall, rampart, fortification



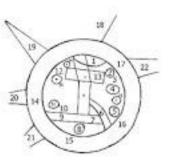




bàd city wall, rampart, fortification







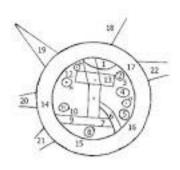


bàd city wall, rampart, fortification

國(国)

お釈迦様の四門出遊







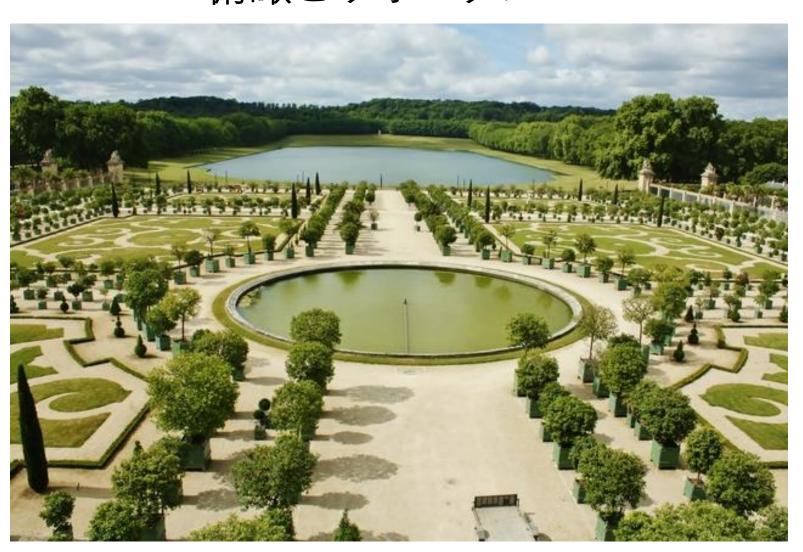
bàd city wall, rampart, fortification

國(国)

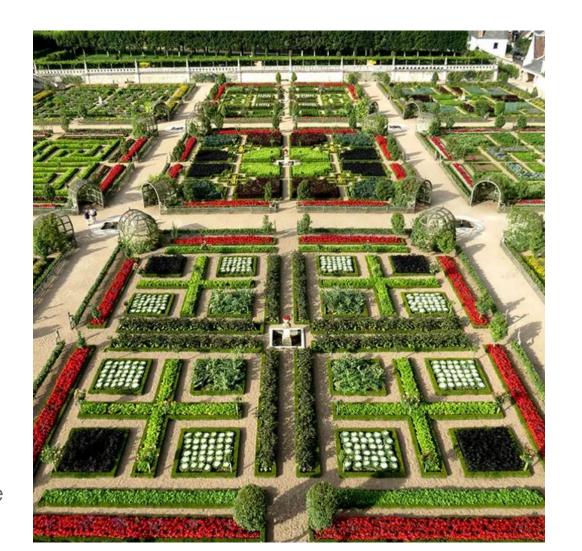
お釈迦様の四門出遊

【くに】:大地の意味

ヴェルサイユ宮殿の庭



ヴィランドリー城の庭

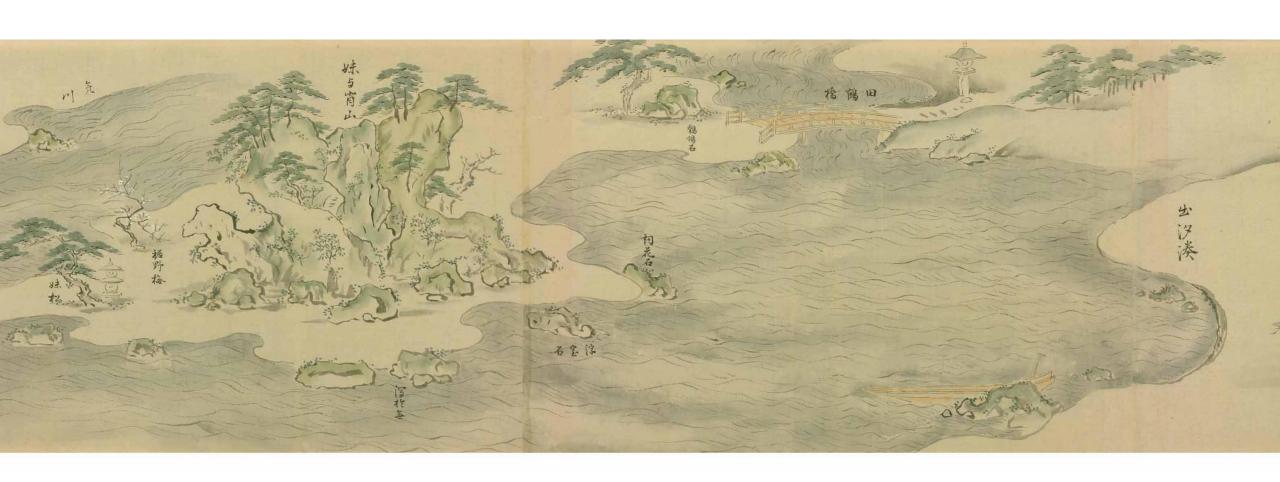


© G. Girard/CRT Centre Val de Loire





六義園絵卷



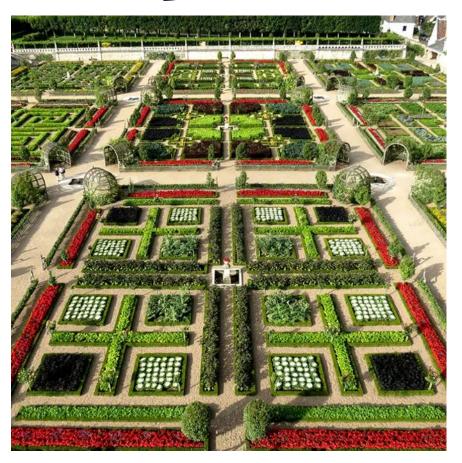


鳥瞰的な庭

ウォークスルー的な庭

鳥瞰的な庭:上から見た姿を想像しながら歩く

ウォークスルー的な庭



鳥瞰的な庭;上から見た姿を想像しながら歩く

ウォークスルー的な庭:歩きながら、さまざまな変化する景色を 楽しみ、また自分でも想像(創造)してゆく。



鳥瞰的な庭

ウォークスルー的な庭→「従属節」のない言語

鳥瞰的な庭

ウォークスルー的な庭→「従属節」のない言語

「従属節」のない言語によるプログラム言語の可能性

見えないものを見るとは

六義園

形 大 名 名 名 R

